

仏教のお話を聞く時には、まず「人身受け難し今すでに受く」から始まる三帰依文を唱和します。私たちは人間に生まれたことを当たり前のように思いがちですが、とんでもないことです。人間に生まれるのはきわめて稀なこと、いわば奇跡のようなことが実現しているのです。人間に、正確に言う人間になる者として生まれました。哲学者カントは「人間は教育によってのみ人間になる」と言っています。教育によって、その人の資質や能力が大きく開花します。与えられた資質に気づき、丁寧に真剣に伸ばすと、人間は驚くべき力を発揮します。現在の最新機器をもってしても測定不能なほどの小さな差異や変化を、五感は捉えられません。想像力は宇宙の彼方にまで及びます。

そこで、人間というものを考えてみましょう。まず、人間は様々な動物と比べても、一人では生きていけないものとして、きわめて未熟に生まれます。助けてもらうことなしには、一日も生きられません。そして少しずつ成熟しますが、未完成のまま死んでいきます。互いに助け、助けられるように生まれついていけるのです。そのために、優しさや思いやりや共感の力を備えて生まれてきました。また相手のちよつとした変化も敏感に感じます。そして私たちは、関係性の中に存在しています。あらゆるものが互いに関係し合い、みんなつながっているのです。補完関係です。自分は私有化できるものではありません、公存在なのです。だから自分中心に物事がうまくいくほど（わがままが通るほど）、結果不幸（こんなはずではなかった）になっていくのです。他人の価値（尊さ）を認めることではじめて自分の価値（尊さ）も認められます。釈尊は「唯我独尊」と、どの人もそのままで尊いと教えています。自他の尊さを裏切らない生き方をしたいものです。

戦争や無差別殺傷というようなことは、目の前の人を、人間という認識はあっても、そこに関係性や価値（尊い）や意味などは一切抹消され、人間が数字や記号になって成り立つのでしよう。

私たちは、つい個別の一人ひとりを特定のジャンルに分けて、ひとくくりに見てしまいます。「ニート」とか「〇〇系」とか「〇型人間」とか。また人間の機能にのみ着目し、必要な機能が果たされるなら誰でもいい（交換可能）と見てしまいます。その機能が換金性を持ち、人間は「人材」という商品になっていきます。実際はどの人も唯一無二の存在で、人格や個別の経験や資質を持っています。代行不能で、かけがえのない存在（無有代者）なのです。それ故に平等なのです。

私たちは関係を切り離して、自己中心になることで気持ちよくなれると勘違いしているようです。また、不快や不便や不足のないのが幸せだと、不如意の排除に専らです。そしてうまくいかないと他を憎み、不快の矛先を外へと向けます。さらに自分こそは、選ばれた特別な存在（超人）で、他は自分に平伏すべきとの思い違いもあるようです。そうやってコミュニケーション不全が、結局その人自身を苦しめます。信頼できないという地獄、安心できないという地獄で。

また私たちは実は、平等なのですが、それは、弱い者同士、できることとできないことがある者同士、古い病み死ぬ者同士というところで平等なのでしよう。そこに「私の都合」がはいると、差別や排他になってしまいます。

いろいろな思いもあるけれど、心の底の本当の願いは他の人とともに気持ちよく生きたいということでしょう。やさしくありたい。やさしく接してほしい。せっかく人間なので、そこから素直に立てないものでしようか。